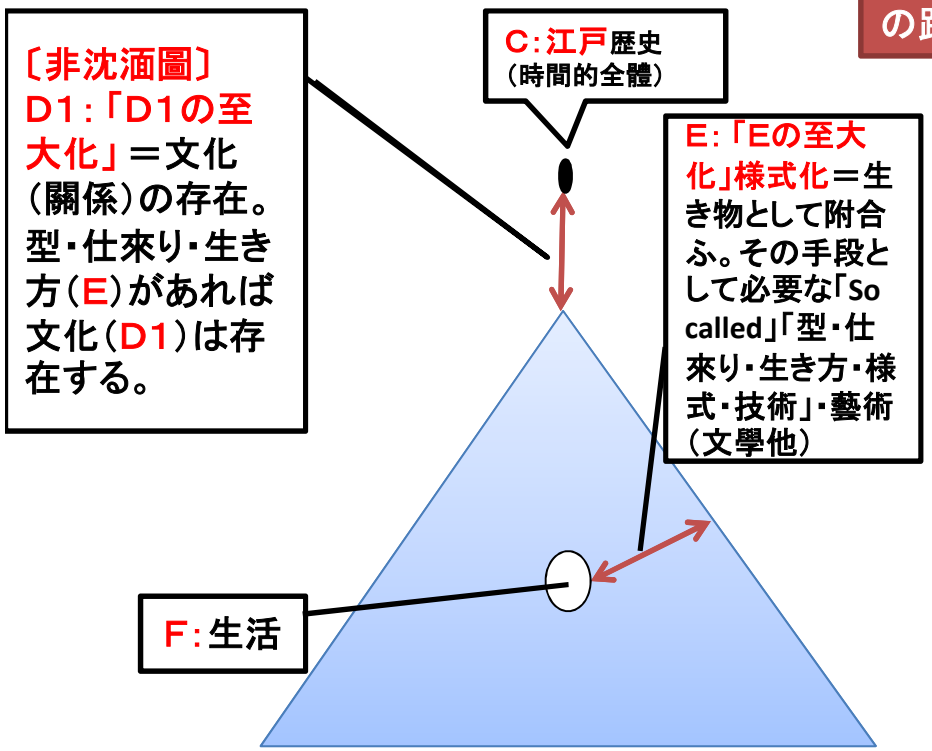
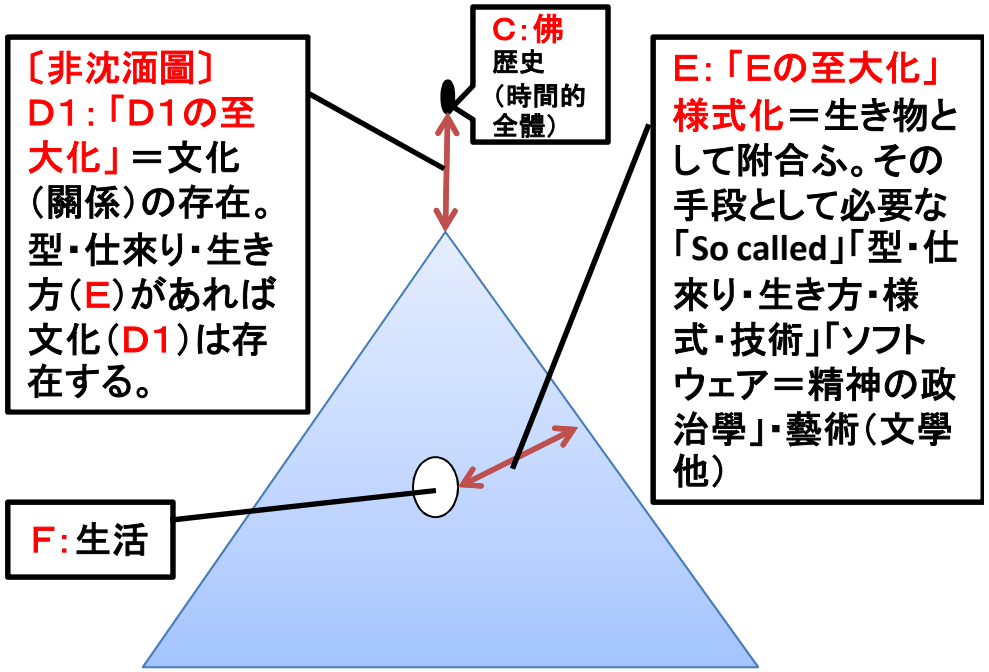
《拙發表文:『傳統にたいする心構』より。恒存理論の圖的言ひ換へ》:當PP圖3～4頁參照。
＊文化(D1)のある處(換言すれば自國の歴史Cとの「適應正常化＝非沈湎」が圖れてゐる國)では、「E」を至大化させる「型・仕來り・様式・儀式」が形成されてゐて、その「型・仕來り」が歴史との關係(文化)を形ある「物」として生き方に反映(Eを至大化)させてくれるのである。文化(D1)のある國は「仕來りE」を持つが故に、「對象・言葉との距離測定不能(言葉に呪縛)」が原因の、適應異常や狂氣の回避が可能となるのである。その事柄を「右圖」で言へば、「D1の至大化＝Eの至大化」と言ふ事になる。「:型・仕來り・様式・儀式」は生活・言葉への囚はれから人を救出してくれるのである。更に換言すれば、平生足をさらはれてゐる様な現實的平面から意識を立ち上がらせてくれる。なぜにそれが可能となるかと言へば、「型・仕來り・様式・儀式」に内在する働き、恒存の文章に從へば、以下枠文のダイナミズムをそれは宿してゐるからなのであると理解する。【「そもそも動作や作用、さらに人間の抽象的な營みを名詞化しようといふ働きそのものが、主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動なのです」(全三P204『日本および日本人』)

〔江戸時代にある「生活の様式化(それが藝術)」〕
＊「生活を様式化するといふ現實的な責任を負はされてゐるだけに、荷風のばあひ、他の同時代の作家の知らなかつた苦痛を嚴しく感じ、しかもそれを彼ははつきりと意識してゐた」。それ故に荷風は「江戸時代」に仏蘭西に通ずるものを観たのであらう。

〔フランスにある「生活の様式化」〕:生活の様式化が藝術(P234)
＊「フランスの藝術と現實との吻合」とは、以下の構圖をさすのであらう。
＊下圖は、「生活・物(F・〇圖)を生き物として附合ふ」即ち、「生き物として」と言ふ、「So called」化、「Eの至大化＝自分と言葉(物)との距離の測定」が出來てゐる状態。